
彼はヒーローでしたか？

でか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼はヒーローでしたか？

【Nコード】

N5884Y

【作者名】

でか

【あらすじ】

他サイトからの重複投稿です。すでに完結していますが、改変もあります。タイトルも若干変わっております。旨と致しましては自分の作品に対する新鮮な意見が欲しかった、ということです。稚拙な文ですがどうかよろしくお願いいたします。

あらすじ：ヒーロー大好きな高校生の『小浦』は自分の住む街にいるヒーローに憧れていた。そんな彼がある日の学校帰りに偶然ヒーローに遭遇する。ヒーローやその手伝いをしているヒロミに流され

あれよあれよと言う間にヒーロー活動を手伝うことになるが……。

第一話：彼がヒーローらしいです。（1）

この街にはヒーローがいる。彼は誰かが困っていると、どこからともなくやってきて救いの手を差し伸べる。ビルからビルへと飛び移り、喧嘩をすれば百戦錬磨。噂によると、とてつもなく凶悪な組織と戦っているとかいないとか。

彼は僕の憧れだ。それは昔からヒーロー物が好きだったことが最大の理由である。オタクみたいな知識は無いけれど、ヒーローに対する愛は誰にも負けない。

今僕の教室から見えている景色を見ると、いつの間にかこの街のどこかで活躍している彼の姿を想像している。それは僕の授業中の唯一の楽しみでもある。

「おい小浦^{こはら}。ぼーっとしてないで、この問題解いてみる」

「え！？ あー、えーと——」

——キーンコン……

ちょうどいい具合に校舎に響きわたった終業の鐘。同時に憂鬱な本日の授業もすべて終了となった。

「助かったなあ小浦よ。まあ次はお前から当てるから、覚悟しておけよー。はい、号令」

やれやれやつと終わった、と寝ていた奴も頭を上げ、集中していた奴らも伸びをしたり隣の子と話たりし始める。それをよそに僕は帰りの準備を始めた。

「こーうーらん！ 帰ろうぜー！」

「うん。帰ろう」

帰りはだいたい決まった奴（または奴ら）と一緒に帰る。こいつ、^{おおほり}大堀もその一人だ。二人はその足で商店街へ向かう。帰り道がその方向ということもあるが、僕は高校二年生で帰宅部であり、まっすぐ帰っても暇なので暇潰しをするのだ。大抵ゲームセンターかファーストフード店に行く。今日はゲームセンター。大堀は『ドラム

の達人』のハイスコアを塗り替えると意気込んでいる。

——二時間後

「フー。フルコンはやっぱ難しぜこの曲。このランク一位の『G D O』って人は神だな。さーて、こうらん。そろそろ帰ろうぜ」

「うん。帰ろう」

無意識に携帯電話を開く。時刻はもうすぐ六時になるところ。まだ空が明るいのは、もうすぐ本格的な夏が始まるのを知らせているのだろうか。でもまだそんなに暑くはない。暑い夏は何かと楽しいことが多くて嫌いじゃないので、僕は暑い到来を楽しみにしている。

「じゃあな、こうらん！ また明日！」

「うん。また明日！」

自宅への帰路の途中には、マンションが立ち並ぶところがある。最近開発が進んで広い空き地のような公園だったところに建ったのだ。遊び場が減るのは迷惑な話だ。と言ってももう空き地で走りまわる歳でもないが。ただやっぱり外で遊ぶ機会が減るのはジョーソ——教育がウンヌンカンヌンという——

不意に光りが僕の目をくらませた。原因は、夕日がマンションの窓に反射したためだった。こういう弊害があるからもっと迷惑であ

る。手を目の前に持つてきて光を遮った時、その光の中にちらつと人影が空を舞う姿を僕は見逃さなかった。まちがいない、彼だ！！僕は息を弾ませながらエレベーターに乗り込んで、最上階へのボタンを押した。そこに居てくれと強く願いながら。あわよくばサインをつ！とも願つて。エレベーターを降りるとすぐさま屋上への階段を探し、登った。長いようで案外短かった階段を登り切ったところでドアが見えた。僕は急いでそれを開けようとした。

「お疲れ。ほれ、ジュース」

その声が聞こえて、ドアノブにかけかかった手を引っ込めた。

「お、サンキュー。いくらだった？」

「金はいらねーよべつに」

声が二つ聞こえる。どういう事だろう。これはここに彼がいると考えていいのだろうか。それにしても、もう一人は誰だろう。声的には女の人みたいだけど、よく聞こえない。

「あー、暑い。今年の夏がもし暑かったら、つらいよこれ」

「もうヘルメット取っちゃまえよ。それにそのままじゃ飲みにくいだろ」

「それもそうだね」

うーん。もっとよく聞きたい。ドアに耳をくっつけた方が聞こえやすいかな。そう思つてドアに耳をつけて、少し体重を前に向けた。ギイッという音と共にドアが開いた。僕はそのまま前のめりになり地面にひれ伏す形になった。幸い両手が前に出ていたので顔を打ち付ける醜態はさらさずにすんだが。

「おふう……」

少し顔を上げると、四本の足が見えた。そのちよつと上にはヘルメットが見えた。間違いない、彼の物だ。僕は期待に胸を膨らませてさらに顔を上げる。

「見いいたあああああああ！！！！」

金色の金属バットを持った女……否、鬼がいた。

「ああああ、ヒロミ、ちよつと落ち着こう!」

彼のヘルメットをもった男の人が鬼を羽交い締めにした。この人、なんだろう見覚えがある。

「おいどこ触ってるんだよ! 変態!」

「あつ、ごめつ!?!」

「隙あり!」

「ぐふあつ」

男の人のみぞおちにアクションスターばりの肘の一発が入った。

そして鬼は封印から解き放たれた。

「てめえ、どうなるか分かってんだろうなあ!!!!!!」

僕の悲鳴は夕方の屋上のもの寂しい景観の中へ、それはそれは美しく響きわたったらしい。

第一話：彼がヒーローらしいです。（2）

「ほーれ、起きろー」

無機質で冷たい感触を頬に感じた。瞼を開けるとジュースの缶を僕の頬に当てている男の人がいた。

「あ、え？」

「おー起きた起きた。死んじゃったかと思ったよ」

うーん、なんで僕は屋上で寝てたんだろう？ でも、なんだかとても怖かったという感情がおぼろげにある。それとこの僕に優しく微笑んでいる男の人は、誰だ？

「ったく、軟弱なやろーだな。私がちょっと脅しただけで気絶するなんて」

金色のバットを担いだ女の人が、僕の顔を覗き込んだ。何故だろう、普通の人に見えるのに、すごく怖い。

「そりゃあヒロミ、君があんな剣幕で脅したら俺だって気絶するよ」

「一発殴りたいのか？」

「遠慮します」

……いまいち状況がつかめない。話によると僕は気絶していたらしいし、よくわからないけどさっさと帰ったほうが良さそうだ。何故だか身の危険を感じるし。

「あの、なんだか分からないけど、ありがとうございました。えーと、お邪魔しました」

僕はそそくさと立ち上がると、近くにあった自分のバックを担いで足早に扉を目指した。いや、つもりだった。気がつくとも目の前には金色のバットの先端があつて、僕の体は静止していた。

「なーにしろつと帰ろうとしてんだ。お前見ただろ？」

「な、何——」

さらにバットの先端が僕の顔面に近づく。反射的に体を少し反らした。

「知らばつくれんな！ 見ただろ？ こいつがあいつの正体だつてよ！」

そう言つて女の人はバットを持っていない方の手で男の人の手元を指さした。そこにはヘルメットがあつて、ああそうかと僕は気絶する前のことを全部思い出した。

「……えーと、はい。見ました」

「わー素直な子」

「お前、ちよつと黙つてろ」

もう太陽は遠くに見える山の向こう側に行きそうで、今日はよく晴れていたので反対側には綺麗な月が見えた。うーん、なんて気持ちのいい夕方なんだろう。

「おら、よそ見てんじゃねえよ！」

誰もここから出さないという剣幕で屋上の出口の方に陣取った女の人は、その鋭い眼光を僕に突き刺した。

「まあまあヒロミ、落ち着こう、な？」

「お前は正体ばれたんだから危機感を持て！」

この温厚な人が、どうやら彼の正体だったようだけど、これがい

わゆるギャップ萌えって奴なのだろうか。それにしても、僕のイメージしてた熱血漢で正義感に溢れている彼とは全然違う。アイドルの私生活を見ると幻滅してしまうそれと一緒にかもしれない。

「で、ヒロミはどうしたいの？」

「それはお前が決めることだろうが」

「いや、だって引き止めたのもヒロミだし、俺はもともと顔をかく

――」

「だあああ！ 私が決めりゃあいんだろお！？」

完全に蚊帳の外。……今のうちに逃げられるんじゃないだろうか？

「おい、変な気起こすなよ」

「はい。ごめんなさい」

それからどんどん日は落ちて薄暗くなってきた。なのに話は全く平行線を保ったままだった。男の人はしきりに携帯電話を覗き込んで是不安そうな顔で女の人を見つめていた。僕は僕で全く話が読めないのもジモジモしていたし、女の人はずっとカリカリしながら金属バットで床を何回も小突いていた。

「なー、もう六時半だし、俺塾あるんだけど」と、この空気の中唐突に男の人は飲み干したジュースの空き缶を両手で弄びながら言った。ヒーローが塾……。僕はあんまり見たくない現実を見た気がした。

「ツチ。わーったよ。私もう知らねえからな！！」

振り下ろしたバットが男の人の空き缶を綺麗に吹き飛ばした。無機質な音が屋上に響き渡った。それにしても、素晴らしいバットさばきだ。

遠くに飛んでった空き缶を拾う男の人のよ所に、女の方は壊れるくらい思いつきり屋上の扉を閉めて帰ってしまった。

「……もう。あー、君、高校、あれだよ、住江高校だよな？」

僕の高校を一発で見抜いたのは制服を見たのだろう。あんまり特徴は無いが、この辺でこの制服といったら僕の通っている高校しかない。

「何年何組？」と彼はヘルメットを付けながら言った。

「二年B組です」

「二年生なんだ」と今度は屈伸をしながら彼。

「そうです」

「うんわかった。明日行くね」

「え？ 明日？」と僕が言い切る前に「じゃ、俺急ぐから！！」と
いって僕に背を向けた。そうしたかと思うと次の瞬間には屋上を全
速力で駆け抜け、フェンスを軽々と乗り越え宙を舞った。

その姿は夕日に映えていて、すごくヒーローぽかった。

第一話：彼がヒーローらしいです。（3）

——翌日——

終業の鐘が昼休みの始まりを告げた。お腹も丁度いいくらいに減っている。購買に昼食を買いに行こう、と僕は席を立った。

そういえば昨日僕のことを迎えに来るとかあの男の人が言っていたけど、結局なんだったのだろう、とふと思った。やはりここは待ったほうがいいか。いや、僕の胃袋はそれを待っていていられるほどの余裕は無い。

にわかに廊下が騒がしくなっていく。きっとみんな購買に向かうのだろう。早く行かなければこの『住江^{すみえ}高校』購買名物の『ソースカツサンド住江スペシャル（略してソーカス）』が売り切れてしまう。こうしてはいられない。

「あれ？ あれ生徒会長じゃない？」

「あれ、ホントだ！ キャー、なんでー？」

僕が教室を出ようとした時、女子がこそこそと盛り上がっている声が聞こえた。少し立ち止まり彼女達の視線を追うと、そこには端正な顔立ちの男の人が立っていた。そして彼と僕は目が合い、彼は僕に満遍の笑みを向けた。

にわかに騒然とする女子達。

「え、今小浦と！？ なんで！？」

「ちよつ、ありえないんですけどー！？」

「まさか……きゃっ」

「やあやあ、迎えに来たよ！」と彼は昨日と変わらない調子で爽やかに僕の方に向かってきた。

「通りで見たことあると思ったら、生徒会長さんだったんですね」

「はは、元だけどね。まあ俺は結構顔知られてると思ってたけど、気づかない君もすごいよ」

「いやあ」

彼は『元』生徒会長。でも任期の時から、爽やかな性格とルックスと申し分のない才能が織り成すカリスマ性を存分に発揮し、その人気から今でも生徒会長や会長の愛称で親しまれている。

そんな彼が実はこの街のヒーローだったということを昨日口止めされたことが記憶に新しい。

「さて、じゃあちよつと時間もらうけど、いいよね？」

「え、あのお昼——」

「青春は待つてくれないよ！ さあ行こう！」

無理やり連れていかれる僕を、クラスの人たちは呆然と、そして好奇心を持って見ていたに違いない。現にこの昼休みの後、女子達の質問攻めという一生に有るか無いかのハーレム状態を味わったのだから。

たどり着いたのは屋上。初夏の空は気持ちいいくらいに透き通っていて、昼休みにここでご飯を食べるのもいいかもしれないなあ、と思った。

「おっせえよ」

飛び降り防止のフェンスに寄りかかって紙パックジュースをすすむ女の人が、うんざりした顔でこっちを睨んだ。昨日のあの女の人だ。なぜか上着に体育のジャージを着ている。今日はそんなに寒いという訳ではないのだけれど、女の子がやることはよく分からない。

「ごめんごめん」

「あー、いいからさっさと要件すまそうぜ」

「そうだね」

まあそこに座って、と会長は僕に座るよう促した。僕は汚れるな
と思いつつも黙ってそこに正座した。

「えーと、まあ昨日見たと思うけど、俺はヒーローなんだよね。う
ん」

ちよつと恥ずかしそうに頭を掻きながら言った。

「意外でした」と僕は本心のまま言った。やっぱり正義の味方はも
つと熱血漢であるのが僕のイメージだったから。

「そう？ まあそれでさ、俺の正体黙って欲しいのは昨日それと
なく言ったよね。まあでもなんていうか、君がよかつたらでいいん
だけど、えーと――」

「あーもうじれってえな！！ 要はお前も私たちの活動手伝って共
犯になれってことだよ！！」と彼女はその勢いのまま紙パックを
握りつぶした。その迫力は僕に「NO」の一言を頭の中から消し去
った。

「きよ、共犯ってひどいんじゃないの？」

「うつせえな、どうでもいいだろ。で、やるのか、やらないのか。

まあ……わかつてるよな？」

「はい。やります」

二つ返事。この場でこの言葉以外を言ったら僕の身が危なかった
はずだ。でも本心からすると正直嬉しかった。だってイメージとは
違ったけれど、大好きなヒーローの助手を出来るなんて、妄想の世
界でしかできないと思っていたからだ。まあ、断ったとしてもどう
せ無理やりやらされるんだろうな。

「よーし決まったな。で、お前名前なんて言うの？」

「小浦です。小浦 勇樹」

ふーん、お前小浦っぽい顔してるしな、と意味不明な事を彼女に
言われ、じゃあ俺は君をこうらんと呼ぼう、と会長。この人達はと
っても自由な人だということが良くわかった瞬間だった。

「よし、小浦って呼んでやる。私は鬼嶋 弘美ね。呼びかたは適当

でいいや」

「じゃあ適當——」

「言つとくが、適當っていう名前とかそういう小ネタはいらねえかな？」

「ごめんなさい」

「あ、俺はとりあえず会長でいいや。元を付けてくれると区別的にありがたいけどね」

「わかりました。えと、これからよろしく願います!」

僕がその言葉を言い終えるのとほぼ同時に昼休み終了の予鈴が鳴った。

(あ、お昼……)

そう思ったが、不思議と空腹感は消えていた。

第二話：彼は本当にヒーローですか？（1）

——放課後——

今日から早速活動開始。拠点は昨日と同じマンションの屋上。いつも場所は適当らしいけれど、会長の塾から近いらしく気に入ったらしい。

会長は屋上に着くとすぐに服を着替え始めた。さすがに制服のままヒーロー活動するのはいろいろと差し支えるのだろう。

「おいっ、いつも言ってるんだろ！ 端っこで着替えるよ！！」

「あ、ごめんごめん」

中途半端に下ろしたズボンを引きずりながら会長は端っこの方向に向かった。

「ったく……」

ヒロミはそう言って少し頬を赤らめながら目を反らした。年頃の女の子なんだな、と何故か少し安心した。それにしても結構初だねえ。ちよつと意外よ。うふふ。

「何ニヤケてんだよ小浦。ホモか？」

「すいません。……って違いますよ！」

ヒーローの格好になった会長を見たとき、あ、やっぱり様になっているなあと僕はため息をついた。と同時に、今さら憧れのヒーローの目の前に立っているんだという興奮を感じた。

「おーし、じゃあいつも通りいくぞ」

「はいはい。いつも通りのサポートよろしく！ いっきまーす！」

目の前のヒーローは僕らに片手を上げ一瞥をした後、ものすごい勢いで街の喧騒の中へと飛び込んでいった。

「あの、ところでサポートってなんですか？」

「ん、まあ見てれば分かる」

そう言って彼女は自分のバックからノートパソコンを取り出した。そして『ヒーロー事務所』という名前のサイトを開いた。

「なんですか、これ？」

「んっふふ。これが私達の情報源。そんでもってこれからすることがサポートね」

このサイトにはいくつかのコンテンツが設置されていた。まずは掲示板。『情報募集中』の文字がキラキラ光っている。

「ここで助けを求めている人の情報を貰うってわけ！」

「つまり掲示板の書き込みを元に、困っている人を助けるってことですか」

「まあそういうこと」

そして次にチャット。ここでは民間人との交流を目的としているらしい。ログを見る限りだと、あまり活用はされていないみたいだ。最後に、何故かこれが一番目立っているのだが、『必読！ 諸注意！』という項目だ。

内容を見た僕はあっけにと取られてしまった。

『当ヒーローはすべての人をお助けできるという訳ではありません。また、救助を求められない限り（直接、または当サイト掲示板への書き込み）は、お助けすることはありません。ボランティア様方の情報を元に、可能な限りはお助けさせて頂く所存です。当ヒーローはあくまでボランティアであり、専門的なものは警察へご相談ください。 管理人より』

「あ、あの……これって……」

「ん？ ああ、たまに居るんだよ、お門違いな文句を言ってくるやつがな。だからだ」

彼女のやれやれといった表情に、僕は少しの違和感を覚えた。

第二話：彼は本当にヒーローですか？（2）

そうこうしているうちに、掲示板に書き込みがあった。

『全力二一ト志望：住江町四番地付近で中学生が絡まれている模様！ 至急来たれり！！』

「おっ、きたきた」

ヒロミは携帯電話を取り出すとなれた手つきでメールを打ち出した。

「こうやって情報をあいつに送るんだ。んで、あいつがそれ見て助けに行くってわけ」

送信ボタンを押しながら、どうだすごいだろうと鼻をふんとならした。でも僕は思った。これってとっても面倒なのでは、と。

「あの、このサイトって携帯でも見れるんですか？」

「ん、ああ。掲示板の書き込みのたいは携帯からだしな」

ならば普通に考えたとしたら、『こつちで書き込みを見る↓メールする↓目的へ向かう』よりも『自分で書き込みを見る↓目的地へ向かう』の方が効率も格段にいいはずだ。僕はその考へを彼女へ伝えた。

「私も最初はそれにして、私も——」

「？」

「——つと、あいつの携帯、規制かけられててネット見れないんだよ。いまどきの高校生が規制とかマジ笑うよな」

一瞬言い換えたのが気になったが、それよりこの協力の仕方は本当に必要かどうかという疑問の方が今の僕には気になる。「じゃあ携帯を貸すとかしたら——」と僕が言おうとすると、「あー？ じゃあお前貸してやれよ」と即返答が返ってきた。

「えっ、それはちよつと……」

「私もそれと同じだ」

この議論はきつと堂々巡りだろう。まあ高校生ができる範囲はこ

の程度なのかもしれない。

それからもだいたい三十分に一回程度書き込みが入った。安全な街だとは思っていたけど、小さな事件やなどは結構起こっている現状には驚きと一抹の恐怖を覚えた。でもそれでも彼のおかげで平和なのだなと思うと、やはり彼はすごいのだなあとまた思う僕だった。

もう二時間は経っただろうか。薄オレンジに染まる空に雲が流れ、初夏の涼し気な風が頬を撫でる。うーん、今日もいい夕方だなあ。

「うつし、そろそろ終わるか」

「あ、はい」

会長へのメールを打つ小さいカチカチという音が、うつすらと屋上に広がっていく。そしてそれを時折吹くビル風の音がさらっていた。

『衝撃の衝動：スミエスーパーの近くで自転車泥棒があつたらしいよ！』

偶然見たパソコンの画面に新しい書き込みが表示された。

「あ、新しい書き込みですよ」

「あー、いいよ無視して」

携帯を閉じて書き込みを横目で見ながらヒロミは言った。

僕は絶句した。と同時にさっき感じた違和感がまた現れた。

ヒーローとは、弱い人を助け、悪を倒す、正義の味方。少なくとも言い訳したり、助けを求める人を無視とかする人じゃない。僕のヒーローはこんなのじゃない……。

「……なんで、なんでですか？　なんで助けないんですか？」

その言葉に彼女は一瞬静止したように見えた。そしてすぐ、鋭い眼光が僕を襲う。

「うるさいなあ……。前からこういう感じでやってんだよ」

もう、我慢できない。その思いが浮かんだ時には、もうすでに口は開いていた。

「助けを求めている人が居るんですよ！？　さっきのサイトだってそうです！　なんでこんな……。こんなのヒーローじゃ——」

「うるさいって言うてんだろ——！」

静かな夕方を怒号が一閃する。その迫力は有無を言わず僕を黙らせた。でもここで引くわけにはいかない。けれどもその後は何も言えなかった。

僕を睨む彼女の目には涙が浮かんでいて、それが何もさせなかったからだ。

「う、あ……」

泣かせた。しかも女の子を。さっきまでの葛藤はどこかに行つて、それだけが頭の中を駆け巡った。

「何も知らないくせに……。お前に何か言われる筋合いは無いん——」

「たっだいま——！」

なんともタイミングの悪い人だ。会長はその場の空気など露知らず、「あー、暑い！　いやあ今日もいい汗かいたよ」と一仕事終わったあとの爽やかな笑顔を見せた。

「あ、あれ？」と思わず発した彼がこの状況に気づいたのは、僕ら

の方に少し歩みを寄せた時だった。

「……気分悪い。帰る」

ヒロミは会長に顔を見せることなくその場から走り去った。

「何かあったの？」と彼女の背中を見送りながら会長は言った。
僕はうつむいて黙ったままでいた。

第三話：彼はヒーローだと思います。（1）

あれから三日たった。この間、あの二人には会っていない。昼休みは教室でいつも通りご飯を食べて、放課後は遊ばずにさつさと家に帰った。やることも無くベットのの上に横になる。するとヒロミのあの泣き顔が浮かぶ。僕は何か間違ったことを言っただろうか。何度も何度もあの時の事を思い出すが、自分に非があるとは思えなかった。

一日でも会わないと気まずい。それが付き合い始めでよくあることだと思う。それが会おうと思えばすぐ会えるほどの近い間柄ならば尚更。それが続けばもう他人。僕は心の中で二人の事を思いながらも、元の日常に戻りつつあったのだ。あの件がなければ。

「ねえ、小浦。生徒会長さんと友達なんですよ？」
「えっ？」

そう、それはヒロミ達と会わなくなつて二日目の昼休みの事。僕は唐突にクラス的女子に声をかけられた。彼女はイギリス人と日本人のハーフで、可愛くて、学年男子の憧れの的。この前の会長から話しかけられた時とは逆に、今度は男子から熱く嫉妬の視線を浴びるはめになった。

「どうなの？」

「ま、まあ友達ってほどじゃないけど」

「そつ。でも話とかするんでしょう？　ならちよつと付いて来てくれない？」

僕は彼女に導かれるままに階段の影になった人目のつかない場所へとたどり着いた。最初に会長の事を聞かれたから僕のことではないの分かっている。といつても、このシュチュエーションは……と一人変に興奮した。でも漫画とかでこういう場面になれば、僕の立

場は――

「単刀直入に言うね。私、生徒会長さんのこと好きなの」

――はじめな噛ませ犬である。僕は会長に嫉妬した。でも、その相手が憧れの対象でもあることに気づき、複雑な気持ちになった。

「でね、小浦に私の告白手伝って欲しいの。おねがい！」

感情に任せて『いいえ』と言えれば僕はどれだけ楽だったろう。

でもその後を考えると、実は『はい』の方が楽だということはしばしばある。きつと僕が『いいえ』と言えば、彼女の取り巻き達はやし立て悪い噂が流れて学校生活が不自由になるだろう。現に学校の何人かは彼女に不快感を与えたばかりに不遇な目に合っている。それが彼女の意思ではなく周りの暴走ということが更に質が悪い。僕は生まれてから十七年で楽を覚えてしまった。それが例え嫌なことだとしても、自動的に楽をしてしまう思考が僕にはできていた。

「ありがとー！！」

気づいたときには、目の前に泣き入りそうなくらい嬉しそうな学年のマドンナが立っていた。

「放課後に校舎裏に呼んで！ 小浦って本当にイイヤツだね！ ありがとう！」

三日目、つまり今日の昼休みにそう言われて僕は屋上へと押しやられた。先日のことがあって気まずいし、さらにその状況下での呼び出しのお願いとか。今すぐここから逃げ出したい。でも、学年

のマドンナとの約束を破ったりしたら、もう学校に来れなくなるかもしれない。いやそれならそれで気苦労が無くなる……。ああもう知らん。どうにでもなれ。

空は曇っていた。そんな中、会長は入り口に背を向けてその空を見ながら一人で昼食をとっていた。第一関門、どうやって声をかけるか。でもその悩みは一気に解消された。

「やあ、こうらん。三日ぶりくらいかな」

「っ!？」

彼は相変わらず僕に背を向けている。なのに先に声をかけてきたのは向こうだった。

「なんで気づいたんですか!？」

「んー、足音? いや、匂い……。かな？」

「す、すごいですね……」

「伊達にヒーローやってないからね!」

それってヒーローと関係あるんですか? と僕は笑いながら彼の隣りに座った。ごく自然な形で。毒気を抜かれたというか、これが元生徒会長の実力といったところだろうか。

でも、すぐに沈黙。僕はただ呼び出しの為に来たのに、頭の中にあるのは別のことばかりだった。ヒロミはあの後またここに来たのか、僕が泣かせてしまったことはもう知っているのか……。

「会長って、モテますよね？」

とりあえず目下の目的だけでも終わらせてしまおう。これ以上悶々としていると屋上に来ている理由を忘れかねない。

「なんだよ急にー? まあ、うん」

パンをかじりながら会長は照れたように言った。

「そこ謙遜するところじゃないですか？」

「いやあ、事実だしなあ」

「じゃ、じゃあ彼女さんとか居るんですか？」

パンを食べる手が止まった。

「……いないよ」

おお、学年のマドンナさん、よかったですね！

「まあ、好きな人はいるけどねえ」

おお……。そりゃあ居るでしょう。モテるのに彼女を作らないのはそれも理由にあるでしょう。……このことは黙っておこう。

第三話：彼はヒーローだと思います。（2）

また沈黙が始まる。会長は相変わらずパンをかじっている。そのパンがちぎっては減り、ちぎっては減りしていくうちに、僕は何故かどんどん追い詰められた気分になっていく。

会長が黙っているのは僕がヒロミを泣かせたせいなのか。それとも一緒に活動しろと言われたのにもうさぼったからか。もしか両方……！？。

「本当にすいませんでした！！」

気づいたときには、僕は正座に座りなおし、頭を地面にこすりつけていた。会長はそれを少し眺めた後、「何のこと？」とまたパンを食べ始めた。ああ、この反応は両方、いやもしかしたら+αがあるかもしれない。

「僕が悪いんです！ 会長のヒーロー活動がヒーローみたいじゃないなんて彼女に言ったから、彼女が泣き出して――」

「そんなことがあったの？」

「えっ？」

あれ、この反応はまさか本当に知らなかったのか？ これは僕とすることが墓穴を掘ってしまった。いやあ、まいったまいった。ははっ。

「詳しく聞かせて貰おうかな？ 小浦君」

「はい。ごめんなさい」

元生徒会長の目に、現役時代の眼光が戻っていた。こんな形での頃の彼を呼び覚ますことになるうとは。

「そうか。そんなことがあの時ねえ」

「ごめんなさい」

会長は僕の話の話を聞いている間、目を合わそうとはしなかった。けれども僕は淡々と語った。時折自分の正当性を交えながら。ほんの数分前のことだが、すぐにそれはとても恥ずかしいことだと思った。「いや。まあこうさんは正しいよ。普通ならそう思うだろうねえ。うん。やっぱそうなんだよねえ。ヒーローばくないんだ俺。こう、なんていうか……、威厳？　というか、雰囲気からヒーローって感じしないよねえ」

違う。確かに僕の中でのヒーローと彼はギャップがあった。むしろ、幻滅した。でもだから彼がヒーローらしくないという訳ではない。現に多少制限的ではあるけれど、この街の平和に貢献している。人気もある。それに街のみんなが彼をヒーローと認めていること。それがなにより彼がヒーローだという証拠ではないだろうか。

「僕は……、会長はヒーローだと思います。活動が云々っただけで、会長はヒーローです」

「……そう言ってくれるのは君が二人目だよ」
ありがとう、と彼は小さく呟いた。

雲間から薄っすらと陽の光が差し始め、屋上の温度は徐々に上がり始めた。先ほどから沈黙が続いているが、それとの相乗効果で僕はうつうつとし始めた。

ああ、まぶたが重い。このまま気持よさに身を任せて寝てしまおうか――

「そっいえば、ヒロミとはその後話したの？」

一瞬で目が覚めた。なに和やかにしているんだ。会長さんに話を聞いてもらっただけで、根本的な解決には繋がっていないじゃないか。とんだお間抜けさんだ。

「いや、全然」

「だーろうねえ」と会長は微笑む。「まあ、謝まれば許してくれるよ。多分」

「多分……ですか」

この場合の多分をどれだけマイナスな意味の多分で取るか。今の僕には『思春期の青年が母親に対して言う、そのうちやる』くらいマイナス寄りに取れる。溜息がでる。早く昼休み終了の鐘がなることを切に願った。

『願いつて、本当に強く思えば叶うんですね！』——なんかのバラエティ番組に出てたアイドル。

『思いの強さが地球を変える！』——なんかの標語。

『私の思いをテレパシーであなたに送りますよ！』——どうかの超能力者。

嘘つきめ……。

「この糞学校が。昼休みに補講とか、どんだけだよ。先生方頑張りすぎだろ。なー、元生徒会長ー、お前なんとかしろよー」

聞き覚えのある、そして今一番聞きたくなかった声が背後から僕を襲う。僕の願いはお空に儚く散ったのさ。もう絶対信じない。

「なんとかっていても、元がついちちゃってる会長だしねえ」

会長さんはにこやかにそう返すが、対するヒロミは僕をその目で捉えた瞬間、露骨に嫌そうな顔をし「こ、小浦……」と、気まずそうに名前を呼んでから口をつぐんだ。先ほど事情を知った会長も苦笑いだ。

「ど、どう——」

「この前はごめんっ！」

「ふえっ？」

いきなりその言動に僕はかなり困惑した。まさか彼女の方から謝罪があるとは夢にも思わなかった。というか、今までの彼女の態度から、この行動は全く予想がでなかった。

「よく考えれば私が変にキレただけだったし。まあ、その、許してくれ。そんで忘れて」

照れ笑いを浮かべて彼女が言う。

「ええ、別にいいですよ。全然気にしてませんでしから。それに僕にも非があるかと」

と、僕は格好がつかない格好つけをした。思っていないこともありまして。

「そっか。ならよかった」

ヒロミが僕と会長の間に座る。僕は少しずれて座りなおした。座る瞬間、僕の耳元で「こいつに言っただけだろな？」とボソッとヒロミは言った。僕は引きつった笑顔を彼女に見せた。後で会長に言ったことは内緒にしてもらわなくては……。

「日が出てきて暖かいですねえ」

「そうだねえ。あ、お茶あるよ？ 暖かいの」

「じじいとお前ら」

時間はそこからゆっくりと流れていった。

第三話：彼はヒーローだと思います。（おまけ）

おまけ

——昼休み終了間際、教室にて——

「ねえ、小浦！ 生徒会長さん来てくれるって言ってた？」

——ダッ！——

「えっ、どこに行くの！？」

（言えない！ 忘れてたなんて……っ！ バレたら学校に入れなくなる……っ！）

「ちよっ、なんで逃げるの！？」

「なんだなんだ！？」

「マドンナが小浦を追っかけてるだど！？」

（ヤバイ、人集まってきた……。会長おおお！ どこにいますかああああああ！？）

五時間目の体育のウォームアップはバッチリだったようです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5884y/>

彼はヒーローでしたか？

2011年11月30日17時54分発行